

## 「『不死身の特攻兵』」

2019年04月27日

戦争末期、「神風特別攻撃隊」と名付けられ、零戦に250キロの爆弾を装備して、米軍艦に体当たりを敢行した「特攻兵たち」は鹿児島島の「知覧」から沖縄に飛び立った。「知覧」には、彼らの悲劇を記念する「知覧特攻平和会館」がある。私は行ったことはないが、本や写真でしばしば見聞きしている。前途ある若者が「死」以外にないところへ追い込まれた苦悩と悲しみを思い、また、そのように追い込んだ当時の指導者たちの無策、非人間性に対して、抑えがたい憤りを覚える。機体のトラブルや悪天候、米軍機の迎撃を受けたり、敵艦隊を発見できなかつたり、また、死にたくないとわざと事故を起こしたり、様々な理由で不時着した者もいた。彼らは、福岡市の「振武寮」に監禁され、社会との接触を断たれ、「なぜ、生きて戻った。卑怯者、人間のクズ」と怒鳴られる地獄を経験している。どんな過酷な作戦でも、生き残る道は必ず見出せるようになってはいるはずであるが、生還できないとは、全く、理不尽な戦闘方法であった。ところが、「必ず、死んでこい」と言われ、9回、出撃したが、命令に背き、生還した特攻兵がいたと聞いて、興味深く思った。作家・演出家の鴻上尚文氏が著した『不死身の特攻兵 軍神はなぜ上官に反抗したか』を見つけ、読んでみた。あの時代に、権力に抗った人を知りたいと思った訳である。

9回出撃し、生還したのは佐々木友次という人で、彼は知覧から出撃したのではなく、フィリピンの日本軍基地から飛び立っている。戦局が大きく傾いた頃、フィリピンで爆弾を搭載した戦闘機で、敵艦に体当たりする「特別隊」が編成され、佐々木伍長は第一回の特攻兵として選ばれた。「特攻隊」の戦果は大々的に報道されたが、それは大本営発表の虚偽であった。彼は9回出撃している。敵艦が発見できなかつたり、大型船を爆撃したり、米軍機から逃れたり、基地に帰還している。帰還すると「きさま、それほど命が欲しいのか、腰抜けめ！」と怒鳴られる。彼は「おことばを返すようですが、死ぬばかりが能ではなく、より多く敵に損害をあたえるのが任務と思います」と言うと、司令官は「馬鹿もん、死んでこいと言ったら死んでくるんだ！」と激怒した。死ぬことが当然とされていたので、彼は生かしておけないと、殺害命令も出されていたという。故郷では2回も盛大な「軍神」の葬儀がなされている。米軍がルソン島に上陸し、山中に逃げ、飢えに苦しむが、米兵に捕捉され、収容所に送られる。1946年、米軍の揚陸船で帰国し、故郷の北海道に辿り着く。農業を営み、4人の子どもに恵まれ、92歳で亡くなられた。

作家の鴻上氏は、晩年の佐々木さんにインタビューをしている。彼の応答は淡々としている。9回も生還しているのだから、よほどの覚悟があったのかと思うが、先祖の守りと寿命で生還できたと言っただけで、何の気負いもない。死へと追い込んだ「特別攻撃隊」を推進した人々や理不尽な扱いをした上官への怒りもない。ただ、突撃して死んでいった戦友への思いと平和への願いは深く、強い。彼は自分の墓に下記のように刻んでいる。

「哀調の切々たる望郷の念と／片道切符を携え散っていった／特攻と云う名の戦友たち／帰還兵である私は今日まで／命の尊さを噛みしめ／亡き精霊と共に悲惨なまでの／戦争を語りつぐ／平和よ永遠なれ」 銚田陸軍教導飛行団特別攻撃隊 佐々木友次

鴻上氏は、終章の「特攻の実像」に、下記の手記を転載しているが、この手記に同感である。「真の戦争の責任を問われるべき連中が、戦没者の慰霊祭の際は、必ず出沒し、英霊にぬかずき、涙を流し、今となって、特攻隊の勇敢さをほめたたえ、遺族をねぎらっているあの偽善の姿である。あのずうずうしさには、身震いさえ感じる。」